

Moodle を活用した e ラーニングの実践 -e ラーニング・マネジメントの失敗から学ぶ-

青山知靖[†] 鈴木直義^{††}

筆者らは、授業時間外での学生とのインタラクションを期待して、Moodle を活用した e ラーニング環境を構築し、筆者らが担当する一般教養科目で e ラーニングの実践を行った。しかし、筆者の期待に反して、学生とのインタラクションはまったくと言っていいほど行われず、e ラーニングの活用はほぼ失敗に終わった。本稿では、筆者らの実践をレビューし、また、学生への質問票調査を通じて、e ラーニングの失敗の原因を探り、成功に導くための要因を探る。

An Experiment with e-Learning Utilizing Moodle: Lessons from e-Learning Management Failure

TOMOYASU AOYAMA[†] NAOYOSHI SUZUKI^{††}

The authors developed an e-learning environment utilizing Moodle in a liberal art course in order to increase interaction with students in after-class tutoring. However, contrary to expectation, almost no online interaction with students occurred, and the utilization of the e-learning environment could not be considered a success. In this paper, the authors review the practice of e-learning, and, using a questionnaire survey given to students, identify the reasons for the e-learning management failure, then discuss the key components of successful e-learning.

1. はじめに

本稿では、筆者らのうち青山が担当する一般教養科目での Moodle を活用した e ラーニングの実践について報告を行う。そして、受講生を対象とした質問票調査の結果を分析することで、筆者らの e ラーニングの実践の成否についての検討を行う。

2. 担当講義の概要

青山は所属学部において、主として1年生を対象とした一般教養科目である「英語で読む国際行動学入門A」を担当している。本講義は、社会学、社会心理学、文化人類学、コミュニケーション学に関する基礎的な英語文献を講読することで、前述の4つの分野に慣れ親しむことを目的としている。今年度は、青山の専門分野であるメディア・コミュニケーション論の観点から、インターネット、WWW、電子メールに関する文献の講読、アメリカにおけるSNS（ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス）とウィキペディアの利用に関する調査報告書の講読、コミュニケーション・シ

ステムの発展についての文献の講読を担当した。本講義は通常の講義形式で、普通教室を使って行われた。本講義の受講登録生は40人であった。

3. Moodle の環境整備と学生への告知

Moodle には、各授業日ごとのシラバスをウェブページとして公開した。そして、文献を読み進めていく上で難解だと思われる英単語・英語表現を解説した講読メモの PDF ファイルを掲載し、印刷物としても配布した。また、授業でのプレゼンテーションに用いるスライドショーのファイルを掲載した。さらに、Moodle の持つ投票機能とフォーラム機能を活用して、授業への満足度を尋ねる場と授業に関する質疑応答の場を設けた。

青山は第2・3回目授業の冒頭において、学生に Moodle への登録を促した。ただし、Moodle への登録は必須ではなく、授業の進展や評価とは直接関係ない、任意のものであるということを強調した。青山は Moodle の URL をパワーポイントのスライドショーで示し、配布資料には記載しなかった。また、登録方法の詳細については授業時間内には言及せず、Moodle にアクセスし授業名をクリックすれば、特別な知識がなくても、比較的簡単に登録可能であることを説明した。また、Moodle に登録すれば、授業で使用するスライドショーのファイルを自分のパソコンに取り入れることができることや、フォーラム機能を用いて筆者と

[†] 静岡県立大学国際関係学部

Faculty of International Relations, University of Shizuoka

^{††} 静岡県立大学経営情報学部

School of Administration and Informatics, University of Shizuoka

の質疑応答がいつでも好きな時に行えることについて言及した。さらに、投票機能を用いた授業評価アンケートへの回答を口頭で促した。

4. Moodle の利用登録

Moodle への登録学生は、5 月 15 日現在で、受講登録者 40 人（うち留学生 3 名）中 15 人（うち留学生 2 名）であった。この結果は、ほぼ全員が登録するであろうという筆者らの期待を大きく下回るものであった。一方で、特に留学生を含めて、登録に成功した学生が存在するということは、Moodle の登録作業自体はそれほど難しいものではなく、登録に関しては特別な指導を行わなくてもよいということを証明している。このことはさらに、授業時間外の自主的な活動を学生に期待する、15 名の対応した学生がいたことは、後述する授業支援のための Moodle 以外の環境が用意されていたことを考慮すると、予想を上回る数字であった。

この数字は、受講登録者の情報リテラシが文系学部 1 年生としてはごく標準的なレベルであることも反映している。すなわち、パソコンや情報ネットワークに対して特段の興味を持つ集団ではなく、受験勉強に支障がない程度のコンピュータリテラシは入学時点でもっている。また、明確な動機付けが与えられなければ取って代わる新たな情報ネットワーク環境に積極的に取り組む訳でもない。それらは次節以後に述べる事実とも符合する。

5. Moodle での学生による活動

Moodle で学生が行った行動は、投票機能を用いた授業満足度評価アンケートへの回答 2 件（2 つの授業日に別の学生が 1 件ずつ、合計 2 件）だけであった。また、フォーラム機能を用いた質疑応答はまったく行われなかった。質疑応答はともかく、満足度評価アンケートへの回答がほとんどなかったことは、筆者らの期待を大きく裏切った。

6. Moodle に関する授業時間外の質問

Moodle に関連する質問を授業時間外に尋ねに来たのは 1 件だけであった。1 人の中国人留学生（2 年生）の Moodle の使い方についての質問であった。この学生は、日本語（と英語）の運用能力が非常に高く、授業での態度は良好で、課題提出などもきっちり行う学生である。質問は、自宅のパソコンではスライドショ

ーの印刷ができない原因を尋ねるものであった。印刷するにはパソコンに PowerPoint または PowerPoint Viewer がインストールされていなければならないことを説明し、学部コンピューター実習室のパソコンでスライドショーを印刷する方法を教えた。

7. 質問票調査の実施と回答の分析

筆者らは e ラーニング・マネジメントの失敗原因を検討するため、5 月 22 日の本講義の終了後に受講生に対して質問票調査を行った。有効回答数は 26 であった。有効回答のうち、男子 6 名、女子 20 名、1 年生 24 名、2 年生 2 名であった。

7.1 Moodle の利用者の回答

26 名の回答者のうち、Moodle を利用したことのある学生は、前述のとおり、15 名であった。この 15 名に利用者登録が簡単だったか難しかったかを質問したところ、6 名が「とても簡単であった」、7 名が「簡単であった」、1 名が「難しかった」、1 名が「とても難しかった」と回答した。このことは、前述のとおり、登録に関しては特別な指導を行わなくてもよいということを証明している。登録をした理由を質問したところ（複数回答可）、「教員の指示に従ったから」が 12 名、「役立つ情報が得られそうだったから」が 5 名、「面白そうだったから」が 1 名と、ほとんどの受講生が青山の指示に従って登録をしたという、やや消極的な理由が目立った。

Moodle が学習に役立ったかどうかを質問したところ、1 名が「とても役に立った」、10 名が「役に立った」、4 名が「あまり役に立たなかった」と回答した。このことは、Moodle が受講者の予習復習におおむね役立っていることを示している。また、意見・感想を自由記述式で質問したところ、授業で用いるスライドショーが自宅でも見ることができて役に立っている、という回答が 2 件得られた。一方逆に、自宅のパソコンに PowerPoint がインストールされていないために、スライドショーを見ることができなくて困っている、という回答が 4 件得られた。

Moodle を利用する場所を質問したところ（複数回答可）、自宅が 13 名、学部コンピューター実習室が 3 名であった。このことから、Moodle を活用して予習復習を行う主な場所は自宅であるということがわかる。つまり、Moodle の利用の有無が自宅でのインターネット利用の有無に依存する傾向にある。受講生全体では、自宅でインターネットを利用できる受講生 20 名のう

ち、14 名が Moodle の利用者登録を行い、6 名が利用者登録を行っていない。また、自宅でインターネットを利用できない6名の受講生は、全員が学部コンピューター実習室の利用者登録を済ませているが、学部コンピューター実習室で Moodle の利用者登録を行ったのは1名だけであった。

前述のとおり、筆者が行った実践では、投票機能を用いた授業満足度評価アンケートへの回答は2件で、フォーラム機能を用いた質疑応答はまったく行われなかった。この理由を検討するために、「掲示板で質問をしなかった理由」と「満足度評価をしなかった理由」を受講生に質問した(複数回答可)。前者の理由として、「質問することがなかったから」が11名、「質問をすることが面倒くさかったから」が3名、「質問を考える時間がなかったから」が3名、「他の誰も質問していなかったから」が1名、それぞれ得られた。後者の理由として、「投票することが面倒くさかったから」が8名、「投票することが恥ずかしかったから」が4名、その他が3名(「特別な指示がなかったから」「投票する時間がなかったから」「投票機能があったことを知らなかったから」各1名)、それぞれ得られた。

7.2 Moodle の非利用者の回答

Moodle の利用者登録を行わなかった受講生には、登録を行わなかった理由と、登録を行うための条件の2点を質問した(複数回答可)。登録を行わなかった理由として、「登録する時間がなかったから」が6名、「自宅でインターネットが利用できないから」が4名、「登録は任意で、必須ではなかったから」が4名、「登録が面倒くさかったから」が2名、「正しく登録できるかどうか不安だったから」が2名、「登録作業を途中で止めたから」が1名、その他が2名(「登録の仕方が難しかったから」「自宅でインターネット利用を始めたばかりで、慣れていないから」各1名)、それぞれ得られた。また、登録を行うための条件として、「自宅でのインターネット利用」が6名、「もっと多くの自由時間」が4名、「教員の積極的に熱意をもった勧誘」が3名、「Moodle についての良い評判」が2名、「登録方法の資料配布」が1名、それぞれ得られた。

また、Moodle の利用者登録を行わなかった受講生に、Moodle についての意見・感想を自由記述式で質問したところ、自宅でインターネットを利用できるようになったら Moodle を利用したい旨の回答が3件得られた。また、「自宅のパソコンにパワーポイントが入っていないとスライドショーを見ることができないというのは本当ですか」という、Moodle の評判を気にする回答も

1 件得られた。さらに、「まだ利用したことはないが、授業内容の確認などが出来る点で良いと思う」「(Moodle への登録についての) 無理な勧誘は登録に嫌気がさすので、『よかったら見て』くらいの今がちょうどいい」という回答もあった。

8. e ラーニング・マネジメントについての反省点

第一に、本講義で Moodle を活用する理由の説明や、Moodle の利用者登録の手順に関する説明をもっと詳細に積極的に行うべきであった。本講義では、第2・3回目授業の冒頭において、学生に Moodle への登録を主に口頭で促した。しかし、口頭だけの指示や奨励は、結果として不十分であった。特に、授業時間外での教員と受講生との間のコミュニケーションを深めたいという、Moodle を活用する理由についての詳細十分な説明を怠ったことは重大な問題である。また、仮想の利用者を想定した Moodle の登録手順のデモンストレーションは授業時間中に簡単に実施できるが、筆者らはこのようなことも行わなかった。

第二に、受講生が自宅でスライドショーを見ることができないということについての気づきと対応が遅れた。受講生が自宅で利用しているパソコンに PowerPoint がインストールされていないであろうことに、講義計画の段階から気がついていべきであった。また、無償で入手・利用が可能な PowerPoint Viewer の存在についても、可能な限り早急に学生に周知するべきであった。これらの点を改善すれば、Moodle の利用についての受講生の満足度はもっと高くなったに違いない。

第三に、学部コンピューター実習室や携帯電話での Moodle の利用についての説明を行うべきであった。自宅にインターネットに接続されたパソコンがなくても、実習室では自由にインターネットが利用でき、確実に Moodle を利用することができる。また、実習室のパソコンにはすべて PowerPoint がインストールされているので、スライドショーを見ることができるだけでなく、スライドショーを配布資料として印刷することができる。携帯電話の利用に関しては、少なくとも、Moodle の利用者登録時に携帯電話のメールアドレスを指定しても構わない、ということと言及すべきであった(実際、利用者登録を行った受講生のうち何名かは、特別な指示がなくても、携帯電話のメールアドレスを指定していた)。

総合して、青山の主に口頭での手短かな説明、指示

や奨励は、受講生の「自主性」を尊重する一方で、自主性を涵養するには十分な働きかけにはなっていなかった。また、自主性を涵養するような実際の授業での雰囲気作りも十分ではなかった。

9. 教員と受講生間のコミュニケーションの実際について

青山は毎回の講義終了時に、無記名での授業評価アンケートを実施し、授業の良かった点、悪かった点、授業で得られた新しい知識、授業で分からなかった点、その他授業に関する意見・要望・提案を調査している。多くの受講生が何らかのコメントを自主的に書き記すため、青山と受講生との間のコミュニケーションを充実したものにすることに非常に役立っている。このため、Moodle では教員と受講生との間のインタラクションはほとんど行われなかったが、授業時間内のフェイス・トゥ・フェイスでのインタラクションは十分に機能したとすることができる。従って、Moodle を活用した e ラーニングの活用はほぼ失敗に終わったが、授業そのものが失敗・破綻したということはない。この授業評価アンケートが十分に機能しているために、受講生にとって Moodle を利用する意義が薄れてしまうということは十分にあり得る。

また、授業時間外のフェイス・トゥ・フェイスでの質疑応答は、前述の留学生による Moodle に関するものの 1 件を除けば、まったく行われなかった。このことを踏まえれば、Moodle を活用したオンラインでの質疑応答がゼロ件であっても何の不思議もない。また、Moodle の利用者登録が 15 人の受講生によって行われたということは、フェイス・トゥ・フェイスのインタラクションの密度と比較すると、それほど悪い結果ではないように思われる。

10. おわりに

本報告では、筆者らの e ラーニングの実践をレビューし、実践の成否についての検討を行った。筆者らは敢えて、周到に根回しや準備をしたり、明確な成果として期待される目標をあらかじめ設定して評価を試みたわけでもなかった。すでに長年にわたり様々な情報リテラシ教育に係わってきた中で、筆者らの中にできあがっている、ある種の予断ともいえるものを前提に授業支援環境を構築し、実行しその結果を分析するという手段を取ってとらなかった。授業自体も情報リテラシを目的とするものではなく、ごく一般の授業の中

の一つである。

にもかかわらず、今回の実践により、あるいは当然の結果といえるもの、あるいは期待を裏切るもの、あるいは予想を上回る結果などが、それぞれの様々な視点に応じて明確にすることが出来た。筆者らはあえてそれを授業支援の失敗、あるいは e ラーニング・マネジメントの失敗と認識し、報告した。そのねらいの一つは筆者らにとっての原点を見定める事であった。今回の試みだけでは実際には必ずしもまだ十分に原点回帰には至らなかった。それはどこまでの仕掛けが許容されるかという迷いが払拭されないままに、とりあえず見切り発車したためである。ともあれ、今回の経験をより厳密反省し次の試行のための手がかりを見つけていく。

それはさておき筆者らは、少なくとも本報告で明らかになった問題点を改善し、今後も Moodle を活用した e ラーニングの実践を継続するつもりである。